

科学・市民・行政が協働で育む自然



新潟県観光
カリスマが
造る

里山

観光資源となりうる理想の里山

時代は正に環境問題が大きく取り上げられている時代でした。「昭和令(れい)終会(しゅうかい)」を立ち上げ、宮本の里山に「雪国植物園」を作り始めました。その後「社団法人平成令終会」となり、雪国植物園の管理・保全を沢山のボランティアの方々とともに、活動し汗を流しています。ここは、あるかまの自然が昔から存在していたように見せるため、計画的に手を加え造りあげた場所です。しかし、人の手が加わらなければ、里山は廃滅し、人が入ることができなくなってしまいます。日ごとに変化する里山の草花を「一番きれいな時に、きれいな状態で」ごらん頂けるように樹木や草花と対話しながら季節の主役を引き立てるような環境を整えています。かつて身近にあった里山を復元し、訪れる人に季節の植物、生き物を楽しみ、心を癒してまた訪れてもらえるように、日々整備を行っています。



雪国植物園 園長
大原久治さん



里山にある草花の名前を知ることが出来ます。草花も生き物もボランティアの作業で生かされています。

作業ボランティア募集!

作業日は毎月第2・4日曜日 AM9:00~PM3:00までです。
下草かりや枝打ちなどそれぞれの体力や特技にあわせた作業があります。
午前や午後だけの参加もOKです。
毎回、40代後半から70代までの10~20名が参加しています。

連絡先 ☎0258-46-0030 雪国植物園 〒940-2042 宮本町3丁目甲2922番地5

連載 月刊寄付白書

げっかんきふはくしょ

緑の募金

「小さな行動が森というカタチになって地球を救う。」

「緑の募金」という活動をみなさんは知っていますか? 森林整備、学校・公共施設の緑化、次世代を担う子どもたちの育成などに使われる募金で、新潟では「地球を救う。ここ(新潟)から始める。」をコンセプトに活動が展開されています。

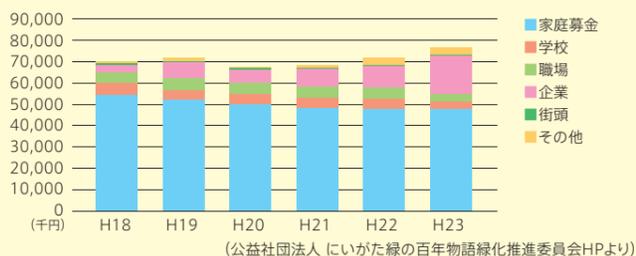
この活動は戦後の荒廃した土地に緑を取り戻す緑化運動として昭和25年に始まり、以来県内の緑化推進の原動力として大きな役割を果たしてきました。毎年、春と秋に募金期間を設け、家庭や企業から募金を集めています。4月には、緑の少年団と呼ばれる市内小中学生を核とするメンバーが長岡駅で街頭募金活動を行っており、宮本・大積地域の小中学生からなる「長岡あおば緑の少年団」、栃尾地域上塩小学校児童からなる

「かみしお緑の少年団」、山古志小学校児童からなる「山古志緑の少年団」の3団体が長岡市内では活動しています。

長岡市の募金実績は約430万円で、新潟県の募金実績は約7,600万円で(ともに平成23年度実績)。募金金額の推移をみていくと、新潟県全体では年々増加し、企業募金の占める割合が増えています。集まった募金は、関原ぬか山の里山保全のための遊歩道整備や寺泊地域での小中学生とともに植樹活動の苗木として使われています。

樹木の成長を感じることで、里山保全に貢献していることを実感できるのが緑の募金の良いところかもしれませんね。今月のらこらにきっかけに、緑の募金にも目を向けてみませんか。

【新潟県緑の募金実績の推移:平成18年~23年度】



第7回 1日店主のも〜れ! 長岡 「里山を楽しむ人たちのも〜れ」 ~雪国植物園を知ろう!~

9.28金
19:00~21:00 (2部構成)
18:30~受付開始
参加申し込み〆切
9月25日(火)
当日、飛び込み参加も可能です。

- 1部 トークセッション
- 2部 オープン交流会(90分)

会場・主催 ●ながお市民協働センター(長岡市大手通1-4-10 アオーレ長岡内 西棟3F)
店主 ●大原久治さん(雪国植物園園長・社団法人平成令終会専務理事)
会費 ●チケット購入⇒1,000円券(100円×10枚綴り)、全メニューに利用可能
※チケットは追加購入も可能。※学生のみチケット半割(初回購入分だけ半額の500円にて提供、2回目以降は通常料金)。
【飲み物】生ビール(400円/チケット4枚)、お茶(200円/チケット2枚)、ノンアルコールビール(200円/チケット2枚)、おつまみ 月替(地域の特産物を提供)
【おつまみ】当日、店主にて発表



店主
大原久治さん

1日店主のも〜れ! 長岡とは
シティホールプラザ「アオーレ長岡」内の市民協働センターにおいて、毎月第4金曜日に月替わりの店主を迎えて開催する2部構成の交流イベントです。店主にまちづくりについての取り組みを聞き、店主おすすめの飲み物・食べ物をつまみながら参加者同士の交流を深めます。長岡をもっと住みよいまにしたい、ご自身の活動をパワーアップさせたい、何か面白いことを始めたい、などなどどんな方でもお気軽にご参加ください。

編集後記
里山を守る熱い方々に出会いました。連携して活動を広げている団体もありました。今後は、さらに市民一人ひとりが関心を持ち、企業、行政と一体となってそれぞれの役割を自覚して保全に取り組んでいくことが求められています。そのことは、それぞれの生活を守ることに繋がっているからです。先日開催された『長岡・灯りの祭典in寺泊』では「海の生物は森の恩恵を川により供給されるという自然のサイクルにより育っております…」と、イベントから環境を考えてもらう試みもありました。できることから少しずつ始めてみましょう。

らこら FREE 2012.9.10(vol.6)
【発行】ながお市民協働センター
市民協働センターPRオープニングイベント実行委員会
〒940-8501 長岡市大手通1丁目4番地10
シティホールプラザアオーレ長岡 西棟3F ながお市民協働センター
Tel.0258-39-2020 Fax.0258-39-2900
Mail. kyodo-c@ao-re.jp URL. http://nkyod.org

里山の守り人たち

かつて人の暮らしの中で里山はとても大切なところでした。薪や炭を得るための伐採や田畑の肥料にするための落ち葉かきにより、太陽の光が差し込む明るい林ができ、そこは、多種多様な植物とそこに棲む多くの生き物を育てていました。里山は、人の手が加わった二次的自然ですが、人と自然が物質循環を持続的にうまく利用し合い共存していました。

しかし、日本経済の発展に伴い、石油や化学肥料の利用、丘陵地を切り開いてのニュータウン計画が進み、日本の原風景である里山はその姿を変えてしまいました。

「このまま荒れていく里山を見てはられない!」と、各地で市民が主役となって保全活動が始まっています。



夏戸城跡(寺泊)



夏戸城跡保存会
成田 純一さん

集落の歴史ある裏山をみんなで守り、自然あふれる夏戸を子ども達に残したい。大好きなふるさとの自然をみんなの知恵と技術を持ち寄り、誰にでも誇れる自然の宝庫として造り上げたい。集落の全戸が保存会の会員となり同じ夢を持ってひとつずつ実現しています。



NPO法人
関原里山・ぬかやま会
布川 清八さん

自分たちが子どもの頃に生きるすべを学んだ里山をもう一度よみがえらせ、子ども達に里山の良さを伝えたい。まだまだ整備を必要とする山は残っているから、同じ思いの仲間との作業は楽しみの一つです。



ぬかやまパーク(関原)



新潟ワイルドライフリサーチ
山本 麻希さん

奥山の森林整備、保全は、そこに住む山の動物の生態系を守ることもあります。里山の整備、保全は、山の動物たちを里地から遠ざけ人の生活を守ることに繋がります。今私たちが行動しなければ、私たちの生活は守られなくなってしまいます。



農林整備課・林業係

主体的に里山整備活動を行っている市民を応援しています。

長岡市は合併により広大な森林が財産としてあります。この森林も整備されずにいるところが多く、現在はこの整備に追われている段階で、行政ではきめ細かな里山整備にまで至らないところが現状です。市内の各地区で、自発的に主体的に里山整備を行っている団体には、助成金等でバックアップしています。今後は、森林だけではなく、里山や人の住む地域までも含んだ自然環境を考えて行く必要があると感じています。

雑木林



NPO法人
新潟県山野草をたずねる会・植生研究会
小日向 孝さん

植物の生きざまに学び、足下の環境や正しい自然認識を深めることを目的に、潜在自然植生構成種の実生育苗と植樹活動を続けています。



NPO法人
越の里山倶楽部
河合 佳代子さん

親子でこの里山に入り、大人にはかつて自然と遊んだ頃のことを思い出してもらい、子ども達には自然の中でわくわくする体験をすることで、人と里山のこれからの関わりを探ってほしい。



森をフィールドとして活動する団体



「学校の森」総合研究所
山之内 義一郎さん

日本のホリスティック教育

学校の森は、子ども達のあらゆる学びの場となります。木々の成長と共に草も生え、そこには虫や鳥も集まります。子ども達はその中でいきいきと過ごします。そして、小さないのちを感じる心は、相手を思いやる心を育て、「愛」が生まれます。子ども達が成長していく段階で、自然の果たす役割は大きいのです。

森のようちえん ふたばっこ 古川 貞子さん

多感な幼少期を本物の森で感じてほしい。

森で活動することで、子どもたちは四季を感じ楽しみながら学び、豊かな感性を身につけることができます。ここでは自らの力で進んでいくことを大切に、大人が見守ることでしなやかに強い心を育てます。まちなかではできない体験ができるのは、この里山だからこそです。



長岡地域にいがた緑の百年物語 緑化推進連絡協議会代表 鈴木 重吉さん

今、自分にできることを考えて。

私たちは今豊かな自然の中で生きることができています。昔の日本人が自然の中に神々の姿を見出したように、私たちは自然によって生かされているのです。しかし、豊かな緑は当たり前にあるものではありません。この自然を次世代に引き継ぐために、私たちは山場に住んでいても市街地に住んでいても今行動しなければいけないときに来ています。



長岡造形大学 上野 裕治教授

里山を考えるには里地も。

里山を利用し適度な働きかけをしていたのは里地に生活する人々でした。現在は、その里地に暮らす人々の生活様式が変化し、里山との関係が崩れてしまいました。当然里山は荒れてしまいます。今一生懸命に里山を整備している人達と里山を利用する人を結びつける必要が有ります。もう昔の生活様式には戻れないのですから、これからのやり方で里山を守ることを考えて行きましょう。農作業は辛いだけではなく、自然との共存を体験できる豊かな人間生活ととらえて、都会人、若者を巻き込むような仕掛けも必要でしょう。



造形大生による案山子アート(栃尾)

里山

雑木林と採草地

里地

奥山